

Title	所得を中心とする経済理論の結構(一)(営利と享楽)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.10 (1916. 10) ,p.1411(79)- 1426(94)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19161001-0079">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19161001-0079</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と不可能なればなり、獨り之のみならず露國は其農産物を直接獨逸に輸出するの困難を見るや之を埒地利、ルーマニア等の諸國に輸出するの策を講ずるに至りしこと前述せる如くにして、是等の諸國と獨逸との間には關稅政策上何等敵意を挾まざりしを以て斯くて埃羅兩國に輸入せられたる露國の農産物は更らに獨逸に向つて轉送せらるゝの有様なりしかば關稅戰爭の永續するに従ひ獨逸は實際上頗る不利益の立場に陥らざるを得ざりしなり、さりながら露國も亦債務國として多額の海外利拂を必要としたる以上は是非其輸出を盛ならしめ以て國民經濟の權衡を維持し其兌換制度の基礎を確乎たらしむるの要あれば關稅戰爭一先づ終りを告げて輸出障害を排除するを得たりしは確かに喜ぶ可き次第なりし也。

吾人が茲に露獨關稅戰爭に付詳記する所ありしは、こは日露戰爭中に獨逸が露國に強要して成立せしめ爾來歐洲戰爭の破裂するに至るまで露國を拘束したりし一九〇四年の露獨通商條約の前提を爲すものに外ならざれば也。

## 所得を中心とする經濟理論の結構(一)

(營利と享樂)

小 泉 信 三

交易經濟組織を形くる各單位の經濟生活は所得を中心として截然相異なる二面を有す。所得を目標とし、之に向て努力する生活と、與へられたる所得を基礎とし、之より出發し、之を手段として個々現實の目的を達せんと努力する生活と即ち是なり。余は姑く前者を名けて營利生活、後者を名けて之れを享樂生活と呼ぶ可し。乃ち所得は二の全く相異なる意味に於て吾人の目に映ず。目的としての所得、手段としその所得是なり。而してこの經濟單位の二種の努力——所得を目標とする努力、所得より出發する努力——は個々經濟單位の自由行動を基礎とする國民經濟に生命を附與し、之れを活動せしむる根本の動力なり。此の理に基づき余は國民經濟生活をその者從て國民經濟上の諸現象を了解せんとする交易經濟理論は同じく所得を

中心として論理的に結構せらる可きもの、少しく具體的に云へば從來の慣用たる生産交換分配消費の區分に代ゆるに所得獲得 (Einkommenerwerb) 及び所得投用 (Einkommenverwendung) を以てし、又此標準に従ふ事に依て、後に示すが如く經濟學上重要な三四の概念を一層明確簡單に把握し得可きを主張せんと欲するものなり。

チュルゴフは既に一七七〇年の昔其著書に標題して「富の形成及び分配論」Recherches sur la formation et la distribution des richesses と云ひしが今日の經濟原論に於て内容を分ちて生産論交換論分配論消費論となす事は佛の J. B. Say 及び英の James Mill に始まりたるものと知らる。何れも十九世初頭の事なり。而して此内容區分は今日に至るまで經濟學に於て最も尊重せらるゝ世襲財産の一にして最近に於ても、經濟理論の研究に新機軸を出さんと苦心する少數學者の場合を除けば弘く世に行はるゝ經濟原論教科書は概ね此慣行に背かざるを常とするに似たり。フイツポフツヒの一般國民經濟學然り、生産及び營利論、交易論、所得及び消費論の三に分

つ)セリグマン、タウシツグの經濟原論然り、ジイドの Cours d'économie politique 亦然り。(ジイドは生産論循環分配消費と云ふ)

此區分は經濟學に於て從來研究せられ發見せられたる理論又は法則例へは價值價格理論、貸銀論、子論、地代論、利潤論又は收穫遞減の法則、最高若くは最低生産費の法則、需要供給法則、グレンシャム法則等を了解し易く排列する上に於て相當に功ある事決して否定す可からずと雖、容るし難きは此區分の甚だ非論理專恣にして理論全體として各經濟單位の私經濟的努力を原動力として複雑多様な諸現象を展開し來る國民經濟生活の真相を闡明すること能はざるの一點なり。經濟原論は其内容を生産論交換論分配論消費論に區分すれども、純然たる技術的過程を除けば生産以外に分配なく生産分配と相對して別に之と並立す可き交換なる過程存する事なし。生産も所謂分配も其實質は所得獲得なり。而して交換は常に一方に所得獲得他方に於ては所得投用の形態若しくは過程としての外之を了解す可からず。少しく詳細に之を説かんに、今日生産論に於て吾人の逢着するは所謂生産要素論なり。勞働土地資本屢々生産されたる生産資料の意味に了解せらるゝ及び是等

を生産の爲めに糾合する企業此中に論せらる。然れども、抑も交易經濟理論中に於て生産は如何なる地位を占むるか。歴史上の事實として過去に存在したる孤立自給の經濟社會若しくは或は將來に期待せらるゝ社會主義共產主義的社會に於ける生産の地位と經濟單位の私經濟的努力を基礎とする現在の經濟組織の下に於ける生産の地位とは全く相同じからず。無交易經濟社會に於ける生産は常に社會全員の必要の爲め、欲望満足の爲めに行はるれども、交易經濟社會に於ては生産は常に欲望満足に非ずして、需要満足の爲めに行はる。主觀的なる個人の欲望が如何にして「所得の投用」なる経路を経て需要となりて現はるゝかの説明は之を後段に譲り今姑らく吾人は需要とは購買力に依て Back せらるゝ欲望の謂なりと解し置く可し。之を要するに需要は全然交易經濟的概念なり。社會各員が如何なる欲望を感じ又如何なる欠乏に苦しみつゝあるや否やは問題とならず、或人の欲望が購買力を伴ひて現はるゝ場合に於て、即ち需要あるに於て始めて之れに應せんが爲めの生産は行はるゝなり。或種の財に對し社會の大多數者が如何に緊切なる欲望を感じつゝあるも之を企つる企業家に、又之に與かる労働者地主資本家に利潤、賃

銀、地代、利子等の形ちに於ける所得をプロミスするに非されは生産は決して行はるゝ事なし。之れ現在經濟組織の最も重大なる特色なり。即ち今日の經濟社會に於て生産は常に營利の手段として行はれ、又營利の手段としてのみ行はる。獨り企業家が營利の爲めに之を行ふのみならず、所謂生産要素の所有者(地主資本家及び労働の所有者たる労働者)も亦營利の目的を以て之に参加す、即ち労働者は賃銀なる形に於て所得を贏ち得んが爲めに労働を、地主は地代を得んが爲めに土地を、又資本家は利子を得んが爲めに資本を賣る。其成果は即ち賃銀、地代、利子の形に於ける所得の獲得なり。而して成果は彼等が唯一の目標なり。知る可し生産は常に企業家、労働者、地主及び資本家凡ての爲めの營利の手段として行はれ、而して純然たる技術的過程(例へば工場内鑛坑内に於ける作業)を除けば、終始交換なる社會的過程——労働と賃銀、土地資本の利用と地代、利子との交換、原料の買入、生産物の賣却——に於て行はるゝ事を、營利の「手段」是れ交易經濟社會に於ける生産の位置なり。

一方生産なる言葉は普通物、財の製作なる意味に解釋せらる。然れども經濟學上に謂ふ所の生産が物質の創造に非ざる事に就ては既に定説あり。人は宇宙間に一

物をも創造する事能はず。又一物をも滅却する事能はず。人間の爲し得る限りは與へられたる物質の位置形狀排置結合を變更する事に依て。利用又は價値を創造増加する事以上に出づること能はずとは凡べての經濟學教科書が教ふる所なり。果して生産の本質は利用又は價値の創造増加に存するか。此論理を徹底せしむる時は生産を物財の製作に限る可らず。更に進んで商業交通業の如き普通の用語に於て生産と見なされざるものに迄之を擴張せざる可らざるの道理に非ずや。例へばセリグマンの如きは現に此論法に依て生産を所謂生産業に限るの不可なるを主張しつつあり。結果今日の經濟社會に於て生産とは營利の目的を以て、即ち或對價を提供すと云ふ事に歸着するには非ざるが。而して此目的の爲めに企業家は所謂生産諸要素を糾合す。然れども糾合と云ふは企業家を中心として見たる言葉のみ、生産要素所有者の側に立ちて見れば糾合はそれ〴〵營利の目的を以てする對價の提供なり。此點に於ては勞働者も地主も資本家も皆企業家たりと云ふも不可なし。宛も企業家が利潤の爲めにすると同じく賃銀地代利子を目的とする勞働者地主及び資本家はそれ〴〵對價を提供す。而して是等利潤賃銀地代利子の凡てを包含

する總稱は即ち所得なり。斯く詮じ來れば生産論に於て當然論せらる可きは所得。贏得論營利論。獨り企業家の營利のみならず同時に亦勞働者地主資本家の營利に外ならざるなり。

さて生産論と相對立せしめらるゝは分配論なるが、今日分配論の標題の下に論せらるゝ所は所得論にして―されば分配論を云ふ代りに所得論又は所得形成論と云ふものあり。然れども英米の學者は猶ほ「富の分配」Distribution of Wealthなる成語を捨てざるが如し。―利潤利子、地代、賃銀に關する理論此中に於て研究せらる。リカードオ以來の世襲財産たる地代法則、賃銀鐵則又は賃銀基金說等は普通學者の好んで論ずる題材なり。併乍ら所得論に名くるに分配なる文字を以てするは果して當を得たりや。余は否と答ふるに躊躇せざるものなり。今日所得形成は分配と稱するにふさはしき過程に於て行はるゝ事なし。自然經濟社會又は共產主義の社會に於ては財の「分配」行はるれども、交易經濟社會に於ては分配なきを特色とす。所得は分配せられずして有價的に獲得せらる。分配に非ずして交換なり。企業家は商品の價格と費用との差額を利潤として收む。何の分配か之あらん。勞働者は出來得る限り

有利なる條件に於て雇はれん事を求め、法律的に云へば契約の效力として一定の賃銀を收む。何の分配か之あらん、資本家の利子を收むる、地主の地代を收むる、何れか等しからざるものなし。論じ來りて此に至れば余は讀者に甚しき唐突の感を與ふる事なくして結論し得可しと信ず、從來の經濟學に所得生産論も分配論も共に當に所得贏得論たる可きものなりと。

二

さて消費論は何を論ず可きか。消費とは財を欲望満足の用に供する事即ち享樂を意味す。然れども享樂その者は經濟學の取扱ふ可き問題に非ず。吾人は所得の一部を投じて食物衣服家屋庭園を買ひて享樂の用に供し、又他の一部を投じて劇場に演技を見、畫廊を訪れて繪畫彫刻を賞す可し。然れども調理されたる食物の味その者、選擇せられる衣服の柄、家屋の宏壯、庭園の美その者を論ずる事は經濟學の範圍内に屬せざる事、猶ほベトオエンのシンフォニイを品し、又は後期印象派の畫風を批評する事が經濟學の任務に非ざるに同じ。經濟學は享樂が投費を促がす限りに於てのみ、即ち今日の經濟社會に於ては吾人が或享樂の爲めに敢て所得の一部

を割て投ずる限りに於てのみ之れを問題とす。カルウソオの技藝は經濟學者の論究す可き限りに非ず、たゞカルウソオを聽かんが爲め人が敢て一夕十圓を投じて奢まざるに至て始めて享樂は吾人が研究の領域内に入り來る。されば經濟學が研究す可き消費は財の消費に非ずして云はゞ所得の消費なり。享樂その者に非ずして享樂の爲めに所得の或部分を投ずる事なり。されば以下享樂なる文字を用ふる時は經濟學上の享樂、即ち享樂を目的として所得を投ずる事を意味するものとす。而して此意味に於ける享樂が需要となりて現はるゝ事は後に説明する所あるべし。

三

今一つの不合理は交換論を生産論分配論と並立せしめ、人をして動もすれば生産分配の外に之と相對す可き交換なる過程存するか如く誤解せしむること是なり。今日吾人が交換論に於て學ぶ最重要なるものは市場及價格に關する理論なるが交換、市場價格等を所得の贏得と引離して論ずるは容るす可らず。純然たる對自然の場合を除けば有ゆる經濟生活上の行爲は常に市場に於て交換の形式に於て行

はれ、凡てこの所得は價格として形成せらる。勞働は市場に提供せられ、價格として賃銀は支拂はる。資本の場合に於ても、然り土地の場合に於ても亦其理は異なる事なし。されば此點に於て、例へばピエルソンが其交換價值論中に於て所得形成論(彼は所得分配の語を用ふれども)をなせるは當を得たり。ピエルソン曰く「勞働も亦貨物と同じく交換價值を有するの一事を思ひ起こせば交換の研究が同時に又所得分配の研究なる事實は益々明瞭となる。地代とは抑も何ぞや。地主は自ら其土地を耕やさずして他に之を賃貸す。言を換へて云へば彼は或人に其土地の利用を許す事に依て其人に或勤勞を給付す。此勤勞は價值を有し、而して其價值が云ひ現はされたるもの即ち地代なり。又貸附資本に對する利子とは何ぞや。又賃銀とは抑も何ぞや。資本家は其資本を自ら用ひずして一時其用を他人に交附し、勞働者は其時と精力とを企業家の支配に委す。此等の勤勞は之を受けたるものに取りて直接の價值を有し、從て之を與へたるものに取りて交換價值を有す。さればこの交換價值の多寡を決定する原因の研究は同時に賣買取引 Commercial Intercourse の結果として社會各階級の間、に社會所得が分配せらるゝ其分配の法則を研究する事となる可し」と

(Pierson, Principles of Economics vol. 1, pp. 76-77) 所得形成が交換の結果として行はれ價格の成立は同時に所得形成なるの意味を道へる點に於てピエルソンは正當なり。以上余は少しく經濟學に於て從來慣用の内容區分を批評して其の不合理を指摘し之を爲す事に依て自説を叙ふるに先だち讀者に多少の準備を與へ得たりと信ず。以下本論に入る可し。

## 四

冒頭に述べたるが如く交易經濟組織の下にありては原則として各經濟單位の經濟生活は相異なりたる二方面を有す。需要者としての經濟單位、供給者としての經濟單位、即是なり。經濟單位は一方に於て供給者たるが故に他面に於て需要者として現はるゝ事を得、需要者たらんが爲めに他面に於て供給者として現はる、而して經濟單位が或は供給者たり、或は需要者たる二種の生活の間に境界を劃し其中心點をなすものは實に所得——貨幣所得の意味に解せらるゝ所得——是なり。即ち各經濟單位は——寄生的生存の場合を除き——一方に於て所得獲得の爲めに努力し他方に於て既に得たる所得を投じて個々の欲望を満たさんが爲めに努力す。而して

今日の經濟社會に於ては所得を得るの途は何等かの對價を提供して有償的に之を獲得するの外あるなし。而して斯くの如くして所得獲得の爲めに努力すと云ふ事は同時に或物の供給者として現はるゝ事を意味するなり。同じ道理にて或者を需要すと云ふ事は同時に所得の投用を意味し、所得の投用は必ず贈與寄附其他の無償的授受の場合を論外に置く(需要を意味せざること能はざるなり。即ち個々の經濟單位は截然相異なる二の意味に於て國民經濟生活に與かるものなる事を知る可し。

(一) 所得獲得者即ち供給者としての經濟單位

(二) 所得投用者即ち需要者としての經濟單位  
是なり。

議論を進むるに先たちて先づ所得の意味を明にし置く事必要なる可し。所得は自然經濟に於ては一定期間内に經濟行爲の結果として經濟單位に流入する財の總量を意味すれども財の獲得の努力は一先づ貨幣獲得の努力に集中し、更に獲得されたる貨幣より出發して財の獲得に到達する事を本則とする貨幣經濟の下に

ありては所得は一定期間内に經濟行爲の結果として經濟單位に流入する貨幣額の意味なりと解す可きものにして、日常語に於ける所得も亦此意味に用ひらるゝを常とす。或は所得を遙かに廣き意味に解する學者あり。例へば福田博士は改定經濟學講義第二版に於て所得を定義して「貨幣額を以て稱量せらるゝ余剰利用(利用より費用を控除したる余剰)又は經濟行爲の結果として新たに一經濟單位に入り來る利用の増加なり、余剰利用なり」と云はる。(一九〇——一九〇一頁)斯く廣き意味に所得を解する場合に起る疑は一定の費用を投じて得たる余剰貨幣額が所得なるか、或は經濟行爲の結果として得たる貨幣額を費用として投じて以て收むる余剰享樂即ちマーシヤルの所謂「消費者余剰」(consumer's surplus)が所得なるか果して如何の點にあり。一ヶ月千圓の貨幣所得あるものが其所得を投じて享樂の用に供したりとすれば何が彼の所得なりや。千圓の貨幣額なりや、或は千圓を投じて得たる享樂その者なりや。兩者共に然りとすれば彼の所得は二千圓(嚴格に云へば二千圓以上)なる可し。之れ明白なる不合理なり。或は余剰享樂その者が所得なりと云ふか。例へばセリグマンは此立場に立つものにして本來所得の本質をなすものは、滿



足の流入」Inflow of satisfactionなるを以て所得は Benefit incomeの義に解す可きものなりと云へり。此の如く廣く所得なる語を解する事は思考の混亂を招く不利益ある傍に之を償ふ可き大なる利益あるを認むる事能はず、余は終始所得を貨幣所得の意味に解し、本篇を通じ此意味に於てのみ此語を用ふ可し。而して斯くする事が思考の明確簡單を期待す可き所以なりと信するものなり。

さて右の意味の所得を中心として前後に若しくは上下に二ツの異なりたる經濟生活展開せらる。所得を目的目標として之に向つて努力する方面及び所得より出發して之を手段として個々現實の欲望を満たさんと努力する方面と、即是なり。一方の生活に取りては所得は標的となり、他の一方の生活には出發點となる。一方の生活に於ては努力は所得に集注し、他の一方に於ては所得は生活に基礎を與ふ而して既に冒頭に述べ置きたるが如く、余は所得の獲得を營利之を目的とする行為を稱して營利行為と名け、所得を基礎とし之より出發して個々現實の欲望を満たす事を稱して享樂と云ふ可し、但し享樂と云ふも經濟學に於て論ずる所は本來の享樂その者に非ずして享樂の爲めに費用として所得の一部を投ずる事にある。

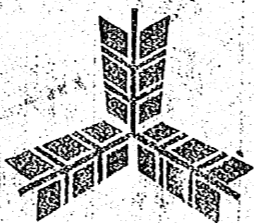
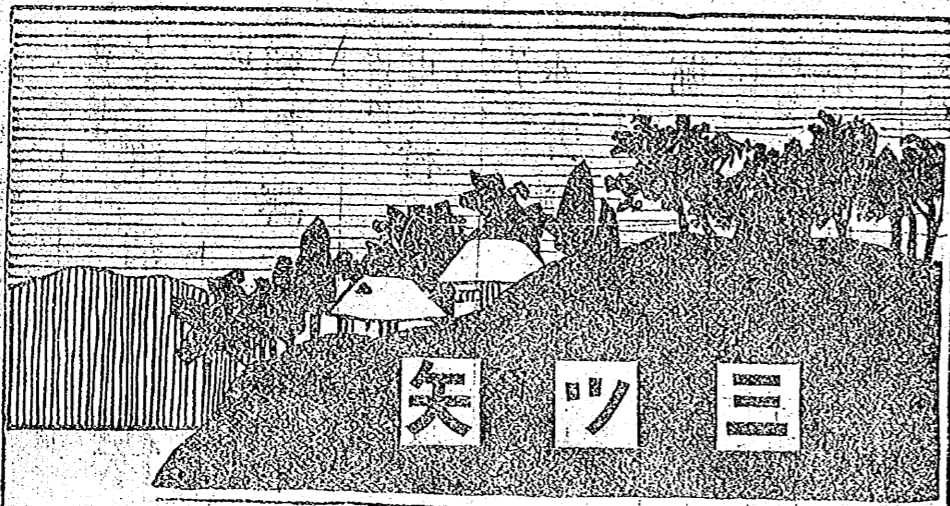
は既に前段に注意し置きたり。所得が經濟生活の目的として現はると云ふ事は所得が「利用」として經濟行為者の目に映ずる事を意味す。その反對に手段として現はるゝ場合に所得は「費用」として了解せらる。而して人間の合理的努力を支配する「最小の費用最大の利用」若しくは「最大餘剩利用」又は「最大收益」の原則はこの二種の經濟生活に於て次の如き相異なる形にて適用せらる。

(一) 營利生活にありては、**最大所得の原則**。

(二) 享樂生活にありては與へられたる所得を投じて得可き**最大餘剩享樂の原則**。

即是なり。

第一の場合に於ては所得額を決定する「費用」「利用」の二要件共に價格形成なる純客觀的事實に依て定められ、而して價格形成は個々の經濟單位に取りては與へられたる確定の事實にして彼等個々の希望欲求は之を左右する上に何等直接の力を有せず。即ち彼等の努力は純客觀的事實なる二の價格形成の間に差額を求むる事にあり、而して其成果たる所得は何人にも共通の事實なる一定の貨幣額にて現



サイダー  
平野水  
記念飲料  
コローナ

三ツ矢の三大特色

- 一 御料品製造の特別なる恩命を拜受せる事
  - 一 天然炭酸瓦斯純良にして豊富なる天然炭酸瓦斯噴出する事
  - 一 胃腸、糖尿、腎臓、氣管、婦人病に特効ある鑛泉にて塩詰する事
- 以上の三大特色は他の清涼飲料水にはありませぬ

三ツ矢サイダー製造元  
三ツ矢平野水  
帝國鑛泉株式會社

はる要するに個人の營利生活は徹頭徹尾「量」の世界、數字の世界に終始し、吾人の努力は一の量と他の量との比較に集注す。一定の貨幣額は主觀的意味を有し得る事あり、同一貨幣額が富者と貧者とに取りて其重要を異にするが如し。然れども一の量と他の量とが比較せらるゝ場合には主觀は全然排除せらる。千圓は何人に取りても一萬圓の十分一なり、五百圓と四百圓の差は何人に取りても百圓なり。此意味に於て營利生活は純客觀的なる量の世界に終始するなり。而して「量」の世界が終りて「質」の世界が始まる所は即ち營利の生活が享樂の生活に移らんとする境界にして、努力の目標として眺められたる所得は此時を限り今や手段として又費用として經濟行爲者の考慮を支配す可く始むるなり。